

(1)

問一	㊦	把握	㊧	離れ	㊨	阻む	㊩	投影	㊪	喪失
問二	資本主義に本源的に内在するアンバランス・無秩序を体现する存在として、ナチスはユダヤ人を捉え、虐殺をし、その事実までなくそうとしたということ。									
問三	王権は、王と臣下の承認の循環、その循環の関係を隠蔽することによって成立しているが、民主主義的指導者や支配者は、人民の承認を得ていることを顕在化し、人民の承認に依存していることをあからさまにして、その地位を得ているから。									
問四	民主主義では、人民の統一性があらかじめ存在して指導者が選ばれているわけではなく、実際は、指導者の単一性が指定されたところに人民の統一性が構成されているのである。したがってファシズムは民主主義の可能な帰結の一つと見なすべきだから。									
問五	プロレタリアとは人民の統一性を不可能なものとする要素である、排除される他者であるが、それを民主的な意思の代表とし、社会的な普遍性を等値するのがプロレタリア独裁の謂いである。通常の民主主義とは正反対といえるが、民主主義とは大衆の支配のことであり、資本主義においては大衆とはプロレタリアに比することができるといふ点と、選挙は個人が行うものであり、統一体としての人民は想定されえないという点で、逆説的に民主主義として評価できる。									

(2)

問一	㊫	まぬか(れ)	㊬	きぐ	㊭	とら(え)	㊮	おもむ(い)	㊯	ちようこう
問二	軍隊の仕来りにうまく順応して行けなかったため、仕事をいい加減に投げ出して呑気にやるうと決意したが、それは自発的なものではなく、追いつめられた結果でしかないと自覚している。									
問三	軍隊においても出世しようとしたために仕事が増え、戦況もわかって悲観的になっている。中山をわざと無視し、あえて楽観的な振る舞いを見せつけたから。									
問四	中山は、自分が属する組織の中で要領よく立ちまわり、自分の立場を確固たるものにしようとしていたが、それは人を蹴落とすような類のものではなく、心根のやさしさを持つ故に自分を守らざるを得ないような、おとなしい人間だと筆者は考えている。									

(3)

問一	a	陰曆五月の梅雨時
	c	月末
問二	e	立ったままで
	f	申し上げよ
問三	b	ぼんやりと物思いにふけていると
	d	ありたいものだ(なあ)
問四	日記は出来事と記述が同時進行するものだが、この作品は後に回想して書いたため、定かでない記憶をさかのぼって記したことから推量の助動詞「べし」が使われている。	
問五	夫の不在の日数が増し、物思いにふける筆者に対して、夫は「山寺にこもるのをやめてあなたのもたに行こう」と返歌したことからすると、互いの心が通じた仲であった、と推測される。	
問四	暗くなってしまったので、参上しないのだ。	
問五	「うき葉の露」と対極にある表現は「花に咲き実になりかはる世」「うき葉の露」は、新邸の造営など夫が栄えてゆく中、筆者は病気のため臥せている状態で、自分の命のほども夫の心もわからない我が身を、消えやすいものとして心細くはかなく思う心情を喩えている。	

(4)

問一	私は洛陽に行かなければならないのに、病気になり、余命はあとわずかです。
問二	馬が連れて来た王恠のことを、かつてその馬を盗んだ張本人であると思ったから。
問三	被旋風に随ひて馬と俱に亡せり。
問四	洛陽に行く途中で出会った病に苦しむ見ず知らずの書生の頼みを聞き入れ、死後彼を葬り、しかも葬儀で余った金を自分のものにせず棺の下に入れておいたという、誰にも知られなかった行為によって、馬と刺繍をした夜着を手に入れることができたということ。
問五	恠即鬻金一斤營其殯葬余金悉置棺下